
將軍足利義昭伝1.1

hisuison

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

將軍足利義昭伝 1・1

【Nコード】

N7666V

【作者名】

h i s u i s o n

【あらすじ】

義昭ちゃんのおまけその1です・・・

今日も丑三つ刻に義昭は蜂蜜のため危険を犯してまで織田信長の蔵に侵入していた・・・

蔵に侵入した理由はというと義昭曰く

「そこに蜂蜜があるから、そしてまろに救いを求めておるからまろは行かねばならぬのじゃ！」らしいが一緒にいる護衛の3人はたまったものではない。

ついでに今着ているのは、まさに絵に書いた如くの泥棒スタイルである。

義昭の頭の上には小さな黄色のリボン付きであるため確実に怪しい団体も可愛らしく見える。

「義昭様、もう夜分遅く体にも良くありませんため館の方へ戻られたほうがよろしくありませんか？」義昭の後ろに構えるガタイのいい男が義昭を娘を見守る父のようなまなざしで問いかけるが、義昭はそれを何かおかしなことを言いおるかと思ふくらしめて不機嫌な雰囲気を出す。

「ふん！ならば貴様だけでもどるがよいではないか、まろはせっかく藤長の眼を欺いて抜けだしてきたのに今から帰りとうはない。世には大人だけが知る夜の世界があるそうじゃからな、それを体験してまろも朝帰りとやらを試してみたいのじゃ！」最後のほうから胸を突き出して満面の笑みをもって答えるが、まったくもって世間知らずな義昭である。

「そうですよね、さすが義昭様！それでこそ真の將軍様です。見

「事な小悪党ですよ」

護衛の一人に褒められ頬を緩む義昭であつたが、次第に顔から笑みが消え頬をひきつる・・・先程の護衛の一人がゆつくりと被りものを脱ぎ捨てて、義昭に微笑みかける（義昭からすれば微笑はにこやかな閻魔の微笑みであつた）

「なんと！こんな所にいたのか藤長まるはたいへん探していたのじやぞ、藤長早く帰って寝屋に戻らねばいけないな。まるはもう眠くて仕方がないのじゃ！と言うつことでお主達夜遊びとやら巫山戯たことを言わずに帰るのじゃ。」

今までも事がなかったかの様に藤長の手を取って帰ろうとする義昭だが、義昭の耳元で藤長の小さな囁いてしまったために帰ってからどの様な罰を受けることになるかを知り目尻に涙をためる。

決心がついたのか義昭が重い足を蔵の入口に向け、一同が帰ろうと蔵の入口を出るとずらりと鉄砲隊が火縄銃を構え待ち構えている、その部隊の後ろには小柄な少女がにつこりと微笑みながらそのつばらな瞳で義昭たちを睨みつけている。

「・・・」蛇に睨まれた力エルのごとく義昭たちは固まり喉を通過していく唾を飲み込むことさえ困難な状態に陥っていた。

「あはは、さすが主様だ。將軍様の動きぐらい簡単におわかりになられる、將軍様おいたが過ぎたようですね」

いたずらが成功したの如く嬉しそうな少女を一同が眺めていると、少女の後ろ方からぞろぞろと人が歩いて来るのが見え義昭一行は顔から血が抜けたかの様に青白くなっていく。

こちらに向かってくる一行の先頭を歩く人物は義昭は最も苦手としてる織田信長その人だ、南蛮の鎧を身につけて真紅の髪を靡かせな

がら向かってくる。横に控える明智光秀・柴田勝家も何故か甲冑姿であり、余計に義昭を恐がらせることになり。遂に義昭はその場にて腰を抜かして自身でたつことができず、上半身だけ動かし藤長の後ろに隠れることな成功する。

「サルよ、よくやった」信長は先程の小柄の少女の近づき少女の頭をひとなでしたあと、腰を抜かして義昭とその一行に歩みより腕の前に組みニヤリと口元を歪ませて義昭を眺めた。

「これはこれは、將軍様。このような所に如何様かな？まさか、盗人まがいなことを為さるおつもりか」体から覇気を発しながら話しだす信長に対して、誰もが口を閉ざし冷や汗が流れる。

この存在感こそが織田信長の魅力の一つであることではない・・・この圧倒的な覇気をして誰の者も抑えつけ、従わない和を乱す者を排除しきり、才ある者・忠義者を取り立てる。

恐怖と言う言葉と共に平穩ももたらず、覇者まさしく戦国を収める異端児になりうる人物である。

信長の姿に怯えながらも、藤長の後ろから顔を覗かせ睨み返すが涙が目元から流れかけている姿はまるで小動物のようだ。

見つめられている信長は口元からたれかける涎を急いで拭き、何食わぬ顔ですまして義昭に手を伸ばすが、あまりの手の動きの怪しさから藤長によつて阻まれてう、信長は藤長を睨みつけるが藤長が退かない為のため息を付き、後ろに構えるネコミミの付き人に後のことを頼むと言い残しぞろぞろと家臣を連れて城下の方へ歩いていった。

信長の一行がぞろぞろと去っていくのを見守った後、その場に残された將軍一行とネコミミ・サル・鉄砲隊・・・怪しい奴らばかりだ

が、気にするまともな奴はこの場には居ない。

「さて貴方達、今から私の言う通りにしなさい！」

ネコミミは無いその胸を突き出し自身げに言うが、他の者はネコミミの無い胸を見ながら憐れみの視線をおくっていた。

視線に気づいたネコミミが発狂して近くの火縄銃で周りの奴を打ちまくったのは言うまでもない。

周り一体が静まり返った頃、倒れ伏す一同を前に髪を乱し脱げかけの服を綺麗に整えたネコミミは何事もなかったかのように喋りだした。

「とにかく、私の言う事をしっかりと実行しなさい！貴方達はこの場で殺されても文句を言えないことしようとしていたのよ」

ネコミミは蔵に指をさしながら言い切ったのだが、先程の味方のはずのサルや鉄砲隊が義昭一行と地べたで座りネコミミについて文句を行っている。

義昭曰く「なんじゃあの小娘は、まるより小さい胸の癖に偉そうなのじゃ！」

藤長曰く「將軍様さすがに胸は関係ないかと思いますが、やたらと偉そうですね」。羽柴さんあのひと誰ですか？」

サル（羽柴）曰く「あのネコミミは信長様のお付きで名前は確か森乱丸とか言ってたと思うよ、そこそこ頭は回るみたいだけどあの胸じゃね。あはは」

鉄砲隊曰く「おお！お主達もなかなかやるではないか、確かにこの義昭ちゃん寝間着バージョンも可愛らしいな。わしらのこの富士に吠える羽柴ちゃんカードもなかなかだぞ」

義昭親衛隊？「確かに小さくポニーテールは素晴らしいが、このカードには致命的な欠点がある！！・・・これを見よ！食事の最中で眠くなってしまった義昭ちゃんカード、そしてこちらがその後の出

来事をなぞった単行本だ！」

最初の3人の言葉に対して血が頭に上がってくるのを感じながらも、後ろのおっさん連中（平均年齢46歳）の会話は身の毛がよだつ程、気持ちが悪いので後ほど排除しようと思つて決める乱丸であるが、なんとか持ち堪えて命令する。

「とにかく、貴方達は今からやる事を手伝ってもらうから。そのでか胸は上杉に上洛命令を出しなさい、將軍の緊急の呼び出しといえは急いでくるでしょ。あと、そのちびっ子將軍と猿！アンタ達は武田との交渉に立ち合ってもらうから、正装に着替えて急いで信長様のもとへ向かいなさい。・・・その男どもは今すぐ蔵の中身の確認と火縄の整備をしなさい嫌ならここで切腹しなさい。」次々と命令す乱丸に対しこいつ一人で話し始めたぜと、皆可哀想な子を見るような目で眺める。

「貴方達に言ってるのよ！早く動きなさい」まったく動くことをしない一行に何処からともなく小型の火縄銃をだし火を点ける突きつけた。

ジリジリと何かが焼ける音を聞き皆弾けるようにその場から別々の方向に逃げ出していく。

その場に残る乱丸はため息を吐き、胸元から櫛をだし髪をときなおい信長の向かった方に走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666v/>

将軍足利義昭伝1.1

2011年10月9日22時04分発行